３次元モデルを活用した平城宮出土唐花文鬼瓦の復元

はじめに　平城宮・京で用いられた鬼瓦は鬼神を表現したいわゆる鬼面文鬼瓦が圧倒的多数を占めるが、その一方で７世紀に盛行した蓮華文とも異なった植物文を飾る鬼瓦が複数型式が存在する。そのうちの一つである唐花文鬼瓦は特異な文様ながら、いずれの個体も摩滅が甚だしく文様の把握が困難であった。今回、この唐花文鬼瓦について３次元モデルを活用して全形復元をおこない、それをもとにレプリカを製作したので報告する[1)]。

復元工程　３次元計測はMetashape pro版（Agisoft社）を用いておこない、全形および文様の復元にはソフトCloudCompareを用いた。欠失部分は反転して復元を補った。

３次元モデルは透明シートに転写して文様の割付に使用したほか、13ヵ所の縦断面と11ヵ所の横断面を３次元データから型紙に起こし、その型紙を格子状に組み（図249）、そこに粘土を盛りつけて粘土原型を作成した。この工程によって実物に忠実な原型を短時間で成形することができたことは特筆できる。この粘土原型をシリコン樹脂で型取りし、さらにエポキシ樹脂を塗布して成形し、最後に彩色を施して完成させた。

ただし、３次元モデルは現状の資料（図250・251）を反映したもので、レプリカ製作にあたっては摩滅の少ない個体の状況を反映させ、笵抜けの良い個体の製作当初の姿を目指した（図252）。色調は摩滅の少ない個体を基に暗灰色とした。

全形および文様の復元　復元した鬼瓦の大きさは全高31.8㎝、下端幅27.7㎝となった。棟積みの高さを表す本体高は21.1㎝、半円形の抉りは下端幅15.0㎝、高10.7㎝である（図252）。全体の縦横比率は高さと幅がほぼ近い値を取る。文様内区は、中央に大ぶりな５弁の花文を置く。花文の軸は鬼瓦の中軸と35度ほどずれている。花の中心はややいびつながら半球状に盛り上がり、中房をイメージした可能性が考えられる。花弁中軸には微かな凸線を設ける。蓮子の表現はみられない。

花文全体および各花弁の周囲を細い蔓茎が囲む。花文の左右にはその蔓茎から派生した各３枚の葉が外向きに配され、半円形抉りの珠文帯圏線から発した蔓茎の根元にも左右各１枚の葉が配される。この葉も摩滅により不明瞭ながら、葉の中軸に葉脈らしき凸線表現があり、葉の表現を意図したものであることは明確である。摩滅の少ない個体を観察すると、葉の部分はベース面から直角に近い角度で立ち上がっており、瓦における文様の表現としては非常に珍しい。文様外区は、平城宮式鬼瓦に特有とされる素文縁を備えず、外形に沿って小粒の珠文をめぐらせる。珠文帯内側には唐草文が左右下端から頂部に向かって展開し、頂部の珠文帯外側では軒平瓦の中心飾りを思わせる文様単位を置いて左右からの唐草文を収束させている。新芽状の細かい支葉が随所に表現される等、繊細な表現が特徴である。また、頂部の珠文帯外側にわずかながら無文体を持つ個体もあり、レプリカはこの無文体を持つ個体として製作した（図252）。外形周囲だけでなく脚下端および半円形抉り部分に沿っても珠文帯がめぐらされているが、抉りの切り取り成形時に珠文帯の半分ほどが切り欠かれた個体もあり、抉りの規定どおりに切り取りが必ずしもおこなわれていない状況が見て取れる。

全体として、周囲の唐草文帯や珠文帯の端正な作りに対し、内区の花文やその蔓草のデザインは軸がぶれたり、歪んだりしており、全体として稚拙な雰囲気を醸し出している。

唐花文鬼瓦の位置づけ　中央に大きく花を配し、周囲を蔓茎と葉で囲む内区の文様は、唐代で盛行し、奈良時代に日本でも大変好まれ、正倉院にも数多く見ることができる唐花文様と同じ構成と認識できる。この鬼瓦は長らく唐草文鬼瓦と通称されてきたが、この文様構成に着目すれば、正しくは「唐花文鬼瓦」と呼称すべきだろう。

図249　３次元データから起こした断面の型紙を組み上げたモデル
（スタジオ三十三提供）

唐花文様を飾る瓦磚の例は多くないが、一例として大宰府出土の文様磚がある。

この唐花文鬼瓦は平城宮の東方官衙域（平城第22・406・429次）で集中して出土した。鬼面文ではない点、外形に沿って珠文帯を備える点といった点は従前の平城宮式鬼瓦とは系統を異にしている。20㎝程の本体長をふまえると、東方官衙域周辺の築地塀等の小型の棟に用いられていた可能性が高い。平城宮跡から出土する鬼面文以外の鬼瓦のうち、本型式や宝相華文鬼瓦、無文鬼瓦等はどれも小型の棟に使用されたと想定でき、大極殿等の格式の高い主要建物には優先的に鬼面文、小型でそれほど格式が求められない建物には鬼面文以外の文様が選択・使用されていた状況が想定できよう。　**（岩戸晶子）**

註

1）３次元計測および３次元モデル作成は、奈良大学大学院生の松島隆介氏が担当し、遺跡・調査技術研究室関係各位の協力を得た。なお、レプリカ製作は株式会社スタジオ三十三がおこなった。

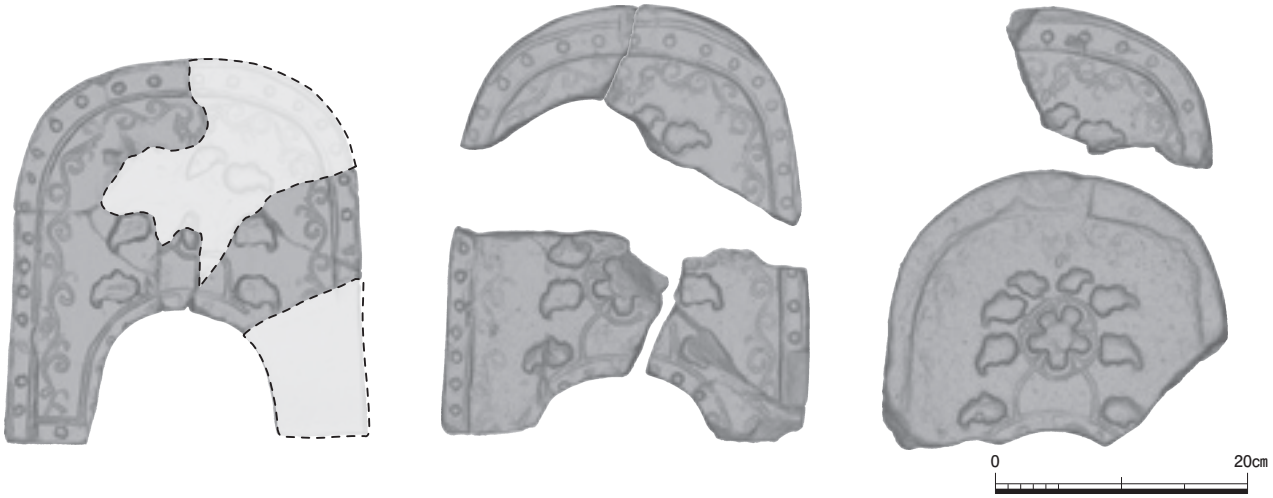

図250　３次元計測をおこなった平城宮・京出土の唐花文鬼瓦　１：６

図251　３次元計測により全形復元した唐花文鬼瓦　１：４

図252　完成した唐花文鬼瓦のレプリカ